

3 年 2 組

## ニコとミッケと幸<sup>コウ</sup>とのくらし

### ~幸<sup>コウ</sup>の除角とミッケとのお別れ~



## 幸<sup>コウ</sup>が苦しいことを受け入れることを、わたしはその時やっていた

幸が産まれて1か月がたつ頃、ニコのお乳をたくさん飲んで、ぐんぐん大きくなっていった幸は、チモシーや草を口に入れるようになっていきました。走り回ったり跳びはねたりして、よく遊んでいます。ニコと子どもたちと一緒に散歩にもよく出かけています。幸が元気いっぱいに育っていることを毎日感じています。

そんな日々成長する幸ですが、ある日、幸の頭に2本の角が生えてきたことに気づきました。山羊の成長としては何ら問題のないことであり、当然のことです。しかし、先のとがった角が伸びるということは危険を伴います。佐藤獣医から、もし除角をするなら1週間後までには決めてほしいとお話を受けました。さらに角が伸びると、除角することが難しくなるためです。すぐに話し合いを始めた子どもたちは、角が生えてきたことについて、驚くというより冷静に受け止めながら今後を考えようとしているように見えました。幸が産まれる前から、「もしオスだったら」と話していた子どもたちなので、ある程度予見できていたのだと思います。すでに自学で山羊の除角について調べていたAさんが、その内容について話しました。その中に、「ショック死の可能性がある」という情報がありました。この「死の可能性」から目を背けない子どもたち。佐藤獣医からも、可能性はかなり低いですが死の可能性はたしかにあるということを聞きました。産まれて間もない幸。大切な、大切な幸。その幸の死などあってはならないことです。しかし、除角をしないと、オス山羊として育つ幸がいつか頭突きを覚えた時、様々な危険や心配が予想されます。そして、いずれニコと幸を引き取ってくださる田中さんからは、「できれば除角してほしい」とお話を受けました。危険を想定してのご意見です。角のあるオス山羊のミッケとくらしできている子どもたちなので、危険については具体的に想定でき、田中さんの考えもよく理解していました。また、ミッケと自分のかかわりの間に、こわさがあることを赤裸々に語り、角があるといつか幸が人から避けられてしまうのではないかと心配も多く語られました。死の可能性があり、痛みを伴う除角。山羊としては本来しなくてもいい除角。しかし、除角をしないと、今後、幸にとっても、ニコとミッケにとっても、わたしたちにとっても危険が予想され、幸が避けられてしまうようことも心配されます。除角をするか、しないか。この間で子どもたちもわたしたちも揺れました。BさんやCさんは、「覚悟が必要だ」と、どちらの選択をするにしても、わたしたちが覚悟をもつこと、心の準備をすることが決めることになるかと語りました。そして、Dさんの、「幸の本当のうれしさ」という言葉から、幸の本当のうれしさは、これからもずっと、わたしたちやたくさんの人にかわいがられることなのではないかと考えていった子どもたち。期限の日、わたしたちは、幸の除角という選択をとることに決めました。

この2日後、佐藤獣医に幸の除角をしていただきました。想定よりも伸びていた角の先端を切り落とし、高温に熱した電気ごてで焼くという処置です。大きな声で鳴き、暴れながらも除角を耐えきった幸。幸に語りかけながら、丁寧に除角してくださった佐藤獣医。後日、その様子の一部を子どもたちと共有しました。EさんとFさんは、次のように思いを綴りました。



幸が正直かわいそうでした。幸が死ななくても、幸がたえられなくてあばれていて、泣いてた。わたしは、げんじつはあまくないと思った。幸が死んじゃうかもしれない中で、ビデオを見るのは正直つらい。さいしょにぜったい除角したくないと言っていた人の気持ちが分かるし、なんかつらいことをやらせたくなかった。除角の後、そう思った。幸が苦しいことを受け入れることを、わたしはその時やっていた。でも、後からどんどんかわいそうになった。やけどしてまでがんばってくれて、すごい。佐藤先生もがんばってくれてすごいうれしかった。(Eさん)

私たちの大切な思い。もっていなければならぬ言葉。それは、「他人事ではない」

すぎたことをネガティブに言って、幸はうれしいのかな？そんなに気にしすぎると落ち着かないかも。山羊は、ふんい気で感じちゃう。いつもとかわらないせし方しているのがいい。(Fさん)

Eさんは、「幸が苦しいことを受け入れることを、わたしはその時やっていた」と、除角を決める時の自分のことを見つめ直し、あの時の自分のことを分かっていったのだと思います。このように、自分を見つめ直していたのはEさんだけではありませんでした。除角に耐える幸の姿を目の当たりにして、「本当によかったのか」、「幸の本当のうれしさは、かわいがられることだけではなかったのではないか」と問い直す姿がありました。子どもたちは、幸を見つめながら、自分を見つめていたのだと思います。

Fさんは、「他人事ではない」という言葉を大切なものとして見いだしていました。除角を決めたのは、幸ではなく、田中さんでもなく、わたしたちです。誰かが決めるのではなく、わたしが決めるのだということを、Fさんは今回実感し、実行していたのだと思います。そのことを自覚しているからこそ、これからも大切にしたいこととして、「他人事ではない」という言葉にしたのだとわたしは捉えました。また、これからのわたしたちについても考えています。後ろ向きになるよりも、自分たちの選択の結果を受け止め、そのうえで幸のためにこれから何ができるのか、前を向いて考えていこうよというメッセージを感じます。幸がずっとかわいがられるように、幸をずっとかわいがっていききたい、そう考えて決めた選択です。傷が癒えてきて、元気に跳び回っている幸を、変わらずかわいがっていくこと、それが今は大切なことなのかもしれません。Fさんの言葉に、わたしは勇気づけられました。

立ち止まり、迷い、自分で決めだし、もう一度向き合って問い直し、自分を見つめ直していく。そして、わたしたちのこれからを考えていく。この中に、一人一人の学びがあることをあらためて感じています。

## 自分を見つめること

10月9日、ミッケとお別れをしました。ミッケは、雄山羊としての仕事をするため、一度別の牧場へ行き、11月には田中さんのもとへ戻る予定です。

わたしたちの悲しみが溢れたのは、ミッケがいなくなった後でした。ミッケがもういないということを分かっていった時だったのだと思います。わたしは、子どもたちに何も声をかけられませんでした。「ミッケ、もう帰ってこない」、「いつもここに寝転んで、ここから首出してたのに」そんな子どもたちの声と涙に、わたしも涙が溢れてきました。ミッケとのお別れの後、ミッケのスペースを幸のスペースにしようとして小屋の改築を考えていましたが、とてもそんな気にはなれませんでした。そう思うのはわたしだけではなく、「このままにしよう」、「ミッケのにおいするよ」、「ここにいるよ」と、子どもたちも、まだそこにミッケを感じていたいと思っているようでした。Gさんは、「思い出が散らばっちゃう気がする」と語りました。ミッケのいた空間に、自分たちとミッケの思い出を留めておきたいと願っていることを感じました。小屋の隙間に挟まったミッケの毛を集める子。リードやブラシのにおいをかぐ子。エサをやったり水をかえたりする子。ミッケはもうここにはいないと分かっているのだけれど、ここにいたい、そういう思いを感じました。そんな姿は、翌日以降もしばらく続きました。

ミッケとのお別れを実感した子どもたちは、これまでのミッケとの日々をふり返っていきました。そして、ミッケとかかわった自分へと目を向けていきました。頭突きをすることがあったミッケにこわさを感じ、距離をとることが多かった子どもたち。それは、決していけないことではないと思います。それでも、そんな自分がミッケにとってどうであったのかを問うていく子どもたちの姿がありました。これまでのミッケとのかかわりの中で感じていた、自分の内にあるものに子どもたちは向き合っていたのだと思います。また、これからの自分を考える人もいました。自分のことをしっかり見つめること。最後に、ミッケがわたしたちに考えさせてくれた気がしています。

